

(2) 隅田八幡神社経塚の理解に寄せて

富加見 泰彦（橋本市文化財保護審議会委員）

はじめに

隅田八幡神社は「国宝 人物画像鏡」を所蔵していることで有名な神社である。平成9年度（1997）の隅田八幡神社正遷宮に伴って本殿の北側の整備事業を行った際に、大きく破損した経筒が不時発見されたことが契機となり橋本市教育委員会による発掘調査が実施され、その内容については『平成10年度 隅田八幡神社経塚発掘調査概報』（橋本市教育委員会 1999）としてすでに公表されている。調査から25年が経過し、この度「隅田八幡経塚報告書」作成の機運が高まり、令和4年度（2022）に刊行されることとなったので一文を草稿する次第である。

1. 経塚とはなにか

関秀夫は「紙本経や一字一石経のような経典を土中に埋納したところ」という（関 1985）。比叡山における滋覚大師円仁の如法写経とその埋納に端を発した経塚築造は、平安時代に入ると、末法思想の影響を受けて、弥勒菩薩と結んでその風習は広く盛んに行われるようになる。平安末期になると次第に極楽往生、現世利益を願う信仰、極めて民衆的な往生思想、血縁供養の信仰に方向付けられ発展を見せる（景山 1974）。書写・供養した経典を供養し、それらを意図的に地中に埋納したもの、あるいは、岩陰、岩盤上など他の場所に配置することによって何らかの功德を得ようとする作善業行為の遺跡が経塚である。

紙本経典は直接埋納されるのではなく、経典を保護した状態で埋納されることが多く、経典を経筒と呼ばれる茶筒状の専用容器にいれ、それをさらに保護するため甕、壺などの

外容器に収め地中に埋納した例が一般的である。経典以外には鏡、短刀、合子などの陶磁器のほか仏・菩薩などが埋納されるのを特徴としている。埋納品に鏡が多いのは、モノの姿を余すところなく映し出すことからヒトの心も真澄鏡の前では本心まで映し出し、包み隠すことはできないという、こうした鏡の持つ神秘性から畏怖の念を呼び起こし、鏡をご神体として崇める心理に発展したものであると理解されている。当然、魔よけの意味もあり、地中に埋めることによって経典などを保護するという常用な役割を果たす。鏡について多く埋納されるのが短刀などの利器で、鏡と同様、魔よけのために収められたと考えられている。経塚の造営は前述のように10世紀の終わり頃発生し、それは仏教的作善行為の一種として、末法思想を背景に弥勒菩薩が釈迦入滅後56億7000万年して下生し、竜華樹の下で説法するときに備えてそれまで経典を伝えたいという意図が含まれる。この行為自体が作善であり現世利益、極楽往生など一般的功德であり平安時代末期から追善供養のために営まれたとされる。

2. 経塚の分布と立地

経塚の造営は、弥勒下生のためという願いのみならず、藤原道長の経筒銘文からも現世利益などが明らかで、経典が弥勒下生時に使えることが前提であり、経典が自然に湧き出てくるように考えられ土地自体の力が必要であった。そのため聖地とされる場所、社寺の境内、または眺望の良い山峰等を選択して経塚を築いているのである。経塚の分布は、例外を除き全国的にみられるが特に山伏修験との関係が密と言われる所以である。

和歌山県における経塚は関秀夫の集成によると32か所となっているが管見では39か所を数えることができる。その違いは熊野三山の経塚の数え方によるものであらうと考えられる。経塚の分布を示したのが図1である。熊野三山、高野山などの経塚群を形成している地域には破壊されてしまった経筒の蓋残欠片が300以上出土しているという（巽 1994）。県内の出土数は紀北筋（高野山含む）を除く

と熊野九十九王子社と、天台宗系の山岳寺院の付近から発見されることが多い。もちろん、熊野三山に近づくにつれ分布の密度は高くなる。特に聖地である熊野本宮経塚群、那智経塚群、新宮経塚群は熊野詣と直接的に結びつくものでその数が多いのは当然の帰結であらう。経塚の出土地を見ると寺院、神社の境内が多く「和歌山県内の経塚についての一考察」（河野 2007）によれば35%が社寺の境内地か

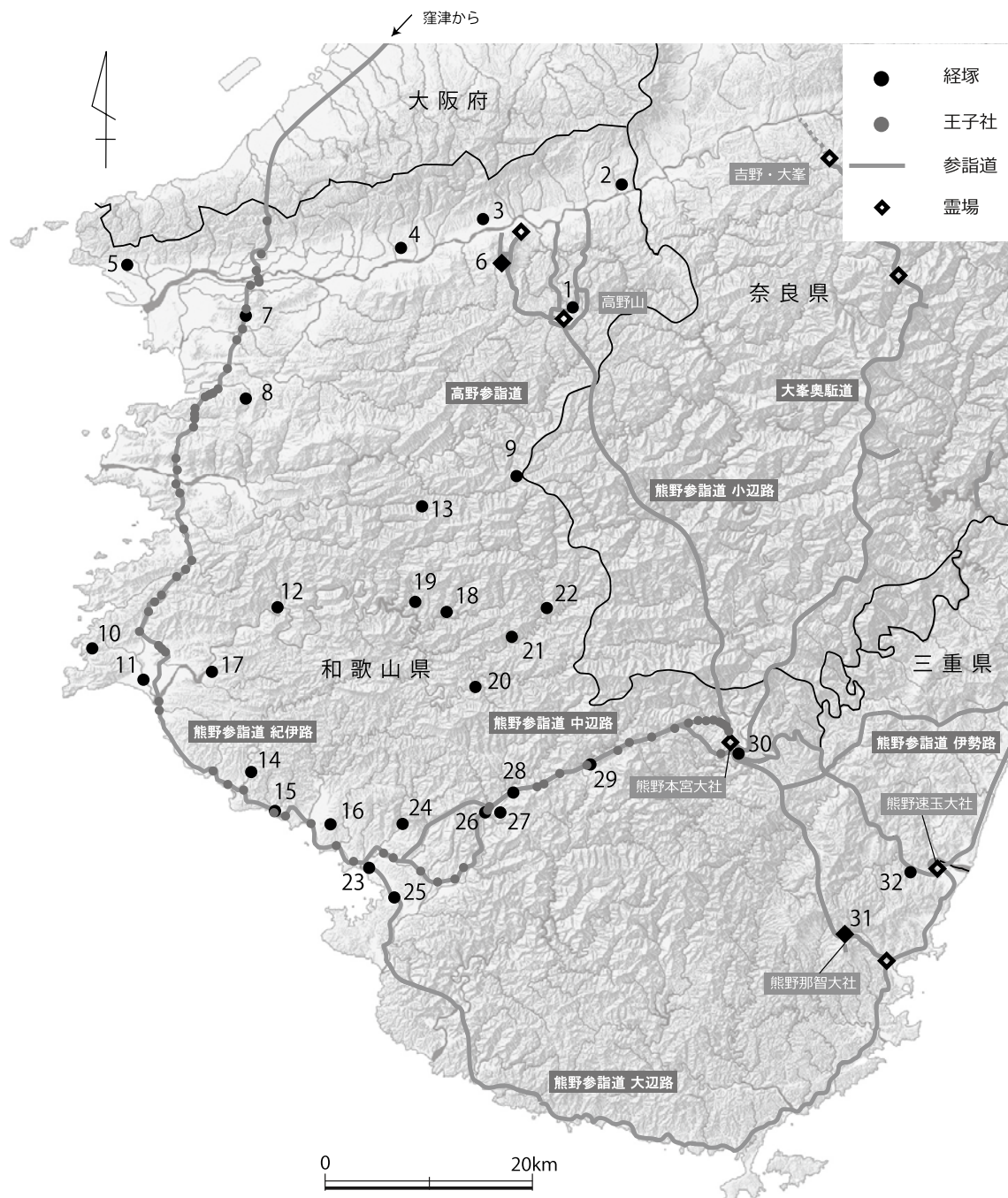


図1：和歌山県内の経塚の分布図

表1：経塚の地名表

	遺跡名	所在地	埋納品
1	高野山比丘尼法葉経塚	高野山奥之院	経巻、曼荼羅、鑄造経、漆塗木製内容器、陶製外容器
2	隅田八幡神社経塚	橋本市隅田	銅製経筒、銅鏡、青白磁小壺、青白磁盒子、白磁皿、常滑焼甕、短刀、火打鎌、銅銭
3	大藪経塚	かつらぎ町大藪	瓦製経筒・瓦製壺、銅鏡、銭貨
4	粉河産土神社経塚	紀ノ川市粉河	紙本経、銅経筒・陶外筒・瓦製経筒・陶壺・瓦製壺、銅鏡、刀子、火打鎌、鉄鈴、鉄鉢、瓦器、鉄鍋、瓦製片口
5	木ノ本経塚	和歌山市木ノ本	陶壺、銅鏡、瓦器皿
6	丹生神社経塚		銅鏡、青白磁盒子、刀子
7	明王寺経塚	和歌山市明王寺	瓦製経筒・陶甕・陶外筒、銅鏡、青白磁盒子、銭貨、陶甕、瓦器皿、瓦器碗
8	願成寺経塚	海南市別所	銅鏡、青白磁盒子、青白磁碗、刀子、瓦器
9	日光神社経塚	有田川町清水	銅鏡、刀子
10	比井王子神社経塚	日高町比井	紙本経、銅経筒、陶甕
11	松原経塚	美浜町吉原	山茶碗
12	西原経塚	日高川町西原	礫石経
13	広原経塚		銅鏡
14	古屋経塚	印南町古屋	銅鏡、青白磁盒子、刀身
15	岩代経塚	みなべ町西岩代	陶壺、銅鏡、青白磁盒子、刀子
16	熊岡経塚	みなべ町熊岡	陶経筒、青白磁盒子、刀子
17	和佐経塚	日高川町和佐	陶外筒、青白磁盒子
18	寒川神社経塚	日高川町寒川	陶壺、銅鏡
19	平の段経塚	日高川町初湯川	銅鏡、青白磁盒子、刀子、山茶碗、袋槍
20	丹生都比売神社	かつらぎ町天野	銅製経筒・銅製経筒蓋・土師質経筒・瓦質経筒・土師質外容器・瓦質外容器・瓦質外容器蓋、土師小皿、中国製青磁碗、鉄製品、丸釘
21	広井原経塚	田辺市龍神村広井原	銅鏡、青白磁盒子、刀子
22	湯本経塚	田辺市龍神村	礫石経、経碑
23	仮庵山経塚	田辺市湊・神田	銅経筒・陶甕・瓦製経筒・陶甕、青白磁盒子、青白磁小壺、青白磁碗、刀子、銭貨
24	高尾山経塚	田辺市上秋津・中畑	経軸、銅経筒・陶甕・銅鏡、鏡筥、青白磁盒子、青白磁小壺、刀身、刀子、銭貨、桧扇、櫛、水晶念珠玉、水晶丸玉、瑠璃小玉、瑠璃吹玉、露玉、黛、皿、鉄鉢
25	朝来経塚	田辺市上富田町朝来上ノ通り	
26	滝尻王子経塚	田辺市中辺路町滝尻	銅経筒、銅鏡、青白磁盒子、銭貨、鉄鉢、不明鉄器類
27	飯盛山経塚	田辺市中辺路町滝尻	銅経筒・陶壺、銭貨
28	興禅寺経塚		
29	高原経塚	田辺市中辺路町高原	経筒・陶壺・陶皿、鉄刀、銭貨、大甕、片口鉢
30	近露王子社経塚	田辺市中辺路町近露	陶甕、青白磁盒子、水晶丸玉
31	本宮経塚	田辺市本宮町黒島	紙本経、銅経筒・陶外筒、
32	備崎経塚	田辺市本宮町	外容器、須恵質経筒・瀬戸製経筒・土師質片・青銅器片・須恵質壺片・瀬戸壺片・瀬戸製経筒、銅鏡、影青盒子、黄釉陶盒子、山茶碗、土師質皿、緑釉壺、緑釉小壺、瓦質皿、仏像
33	那智経塚	田辺市那智勝浦町那智山	水晶、銅経筒・銅経筒蓋・銅経筒底板・陶鉢・陶甕・陶壺・銅鏡、盒子蓋、青白磁盒子、青白磁碗、青白磁四耳壺、青白磁小壺、青白磁小皿、刀子、刀身、銅佛像類、塔、三昧耶形、佛具、銭貨、土器片、土器蓋、槍身、金銅獅子、陶壺、白磁香炉、銅製碗、三鈷杵、五鈷杵、鉄戈、御正体、瓦塔、銅水瓶、銅水滴、山茶碗、羯磨、懸仏、鉄製品片、火打鎌
	那智礫石経塚	田辺市那智勝浦町那智山	礫石経、六器、木片
34	那智枯池経塚	田辺市那智勝浦町那智山	礫石経
35	庵主池経塚	新宮市相筋町下相筋	紙本経、陶壺・銅経筒・陶片口鉢、銅鏡、青白磁盒子、刀子、陶碗、地藏菩薩泥像、鉄槍、土師器皿、鉄鈴、火打鎌、銭貨、不明金具
36	如法堂経塚	新宮市相筋町下相筋	紙本経、陶壺・銅経筒・陶経筒・銅鏡、青白磁盒子、刀子、佛像残欠、花瓶（懸仏）、礫石、経碑、銭貨、金円板線刻佛像
37	神倉山経塚	新宮市権現山	経巻・経軸・礫石経、銅経筒・瓦経筒・陶壺・銅経筒蓋・土経筒・陶経筒・須恵器片口鉢・陶甕、銅鏡、青白磁盒子、青白磁小壺、刀子、銭貨、佛像、懸佛金具、懸佛台盤、水晶玉、ガラス小玉、銭貨、驛鈴片、須恵器皿、土師器皿、瑠璃小玉、露飾棒
38	阿須賀神社経塚	新宮市阿須賀町	礫石経、銅経筒・陶甕、銭貨
39	宮井戸経塚	新宮市熊野池	礫石経
40	南出経塚	橋本市南出通	礫石経

ら見つかったもので、社寺に関連する裏山、参詣道なども考慮すると74%を占めるといえる。そもそも山深い神仏習合の色彩の強い山岳寺院、修験道的な信仰の色彩を持った場所、紀伊半島では熊野の那智経塚、新宮経塚など、あるいは天台宗の伽藍の付近において、直接的、間接的にそれら宗教施設と有機的な関連を以て築造されることが多いといえる。

3. 隅田八幡神社経塚

橋本市の東部はかつて隅田^{すだ}荘と呼ばれ、京都石清水八幡宮の荘園として平安時代に成立した。この荘園には石清水八幡宮から別宮として八幡社が勧請され、隅田八幡神社として現在も鎮座している。なかでも神宝の国宝人物画像鏡は日本最古の金石文としてあまりにも有名である。

当社の創建は明らかではないが、在地資料によると12世紀初めの長治2年(1105)に「長 忠延」が別宮の俗別当職として登場するのが初見である。「長 忠延」は天永2年(1111)に隅田荘公文職にも任じられていて両職を兼ね信仰と行政を掌握していた人物である。その職は代々子孫に受け継がれ、武士化するにおよんで鎌倉時代には紀伊国守護となった北条氏の被官となり重用されることとなった。隅田八幡神社は、隅田一党の信仰の中心であり正月の朝拝、8月の放生会が行われたことが建長5年(1253)の「八幡別宮明年朝拝頭人差定状」、元亨2年(1322)の「隅田八幡宮明年御放生会頭人差定状」などの資料からうかがい知ることができる。法華経供養もしばしば行われ、弘安10年(1287)、嘉暦2年(1327)、嘉暦3年(1328)、嘉暦4年(1329)、正平20年(1365)の資料によって知ることができる。

経典埋納経塚は3基発見され、第1経塚は外周石垣のほぼ中央に位置する元中2年(1385)の宝篋印塔の真下に埋納、第1経塚の東50cm

第2経塚、西80cmの位置に第3経塚がある。いずれも経塚に周囲は石列によって画され、平らな石を敷設する。第1経塚は、報告によると後世に幾度が改変されているようで保存状態は悪く破損した経筒のほか本来は外容器であったと推察される須恵器甕、備前焼甕の破片が散乱していた。第2経塚は一辺約3mの正方形に画された石垣の中央に位置し保存状態が最も良い。常滑焼の甕を外容器とし、甕の中には銅製経筒(27)、銅鏡(39~41)、青白磁小壺(46、51)が収められている。外容器と石組の隙間には短刀、銅鏡、青白磁小壺、合子、銅銭、火打鎌が出土している。経筒内には8巻の法華経の経巻が確認されている。第3経塚は検出された経塚の中では新しく、経筒は検出されていないが底の平石と銅鏡3面が検出されている。半壊状態で見つかった経筒は器高を復元すると13.7cmと低い。鎌倉時代の経筒は18cm前後とやや低くなり室町時代になるとさらに10cm前後となる。これは収納経巻の寸法に関係し、室町時代には経塚营造が廻国納経と結びつき、必然的に小型軽量化が望まれたためである。このことを考えると当経筒は室町期と考えることが妥当であろうと推察される。筒身の外側、または内部や蓋の表裏に銘文、図像がみられることが多く、陰刻・篋書で抽出・墨書きの例もある。銘文には営んだ人々の名前・年月日、経典の種類、目的などが記されている。このように考えると、第1経塚の外容器は法量から須恵質の甕が妥当かと考えられるが、バラバラの状態で検出された比較的時期の新しい備前焼(器高62.3cm)甕も、その蓋然性は捨てきれないと思われる。検証する余裕は持ち合わせていないので、今後の検討課題といえる。

以下、紀の川筋に造営された経塚を隅田八幡神社経塚を理解するうえで参考となるので掲げておく。

(1) 高野山奥之院出土経塚 高野町高野山

真言宗の総本山空海が開いた高野山の奥の院から出土した「天永四年（1113）在銘経筒」は、禁足地である御廟に近いところから偶然発見されたものである。外容器は陶製の筒型を呈し、上端に小孔のある三耳を付け、印籠形の蓋が付いている。裏面には「諸行無常是生滅法生滅々已寂滅為薬永久二年甲午九月十日千午奉之尼法楽」の墨書名がある。この外容器内に円筒形銅製経筒が収められ、筒の上には方形の枠内に「天永四年^{美巳}五月三日^{壬午}比丘尼法楽奉書之矣」の銘文が陽鑄されている。経筒内に檜材の漆塗り容器があつて、容器の底には絹本墨書曼荼羅を畳んで敷き、その上に紺紙金泥などの

経巻 11 巻、供養目録、法薬願文を経帙で包納し組紐で結び、さらに麻紙で包んで納入されている。内容も極めて豊富で保存良好な資料は、我が国経塚関係遺物の中でも特に優れたものと言われる。法薬願踏文の末尾には「為期弥勒慈尊出世之時…弘法大師…永久二年三月十五日比丘尼法楽」とあり、弥勒の世まで経巻の護持を願った法薬尼の強い大師信仰がうかがえる。

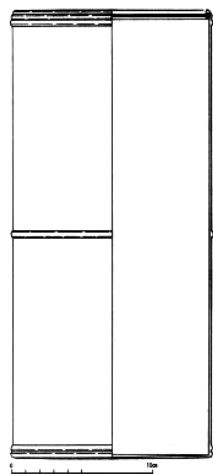


図2：高野山奥之院出土銅製経筒実測図

(2) 大藪経塚 伊都郡かつらぎ町大藪

慶勝寺墓地拡張工事で椎の大木の根元、表土下約 40cm から出土したといわれる。県史には以下のような聞き取り調査が記載されている。「径約 10cm の平らな川原石が 10 数個一重に整然と敷かれた状態で出土した。その下部から約 15cm × 20cm の平らな川原石とこ

れよりやや大きめの片岩があり、上下に重なって発見された。2 枚の岩石の下は径約 40cm の空洞であった。外容器の発見であった。(略)中に径約 15cm の円形の平らな石の上に経筒が安置されその横に和鏡が埋納されていた」という。出土遺物は須恵器外容器、瓦製経筒、和鏡（菊花飛鳥鏡）、宋銭「元祐通宝」



写真 1

(宋 初鑄 1086 年) がある。「元祐通宝」は隅田八幡経塚でも埋納されている宋銭である。

(3) 粉河産土神社経塚 紀ノ川市粉河寺境内

粉河寺本堂裏の粉河産土神社背後の風猛山南斜面で植林中に石の下から経筒が発見された。その後 2 基の経塚と井戸が発見された。第 1 号経塚は平安末期天治 2 年（1125）のもので、陶製外容器は自然石を蓋にしたもので口縁部を除き旧態を保っていた。内部には、青銅製の有蓋経筒があつたが伴出物は認められなかった。第 2 号経塚は鎌倉初期のもので、深さ 50cm、径 45cm の穴を穿ち、周りに人頭大の自然石を並べ東西 1.4m、南北 1.6m の方形の区画を構築している。土壌には須恵質の片口鉢を蓋にした常滑壺が置かれ、中には経筒が収められ、外には短刀、鉄鈴、鉄挟、鉄鎌、鉄製提子、瓦器碗が副納されていた。第 3 号経塚は、石郭は大きく破壊され、多



写真 2

数の木炭に混じって常滑甕片、短刀、鏡、鉄製鍋、瓦器が散乱した状態で、上部からは瓦質の三耳壺片、須恵器壺の底部、青磁片が発見されている。瓦質三耳壺は経巻を収めていた容器として用いられたものと考えられる。常滑焼壺からは山吹双雀鏡、山吹若松双鳥鏡、蓬萊山鴛鴦鏡、素文六花鏡片、飛雀鏡片が出土している。平安時代から鎌倉時代にかけてのものと考えられている。社務所裏の法面から、かつて十数枚の小型の土師器皿を主とした遺物を採取したことがある。風猛山南斜面全体に経塚が造営されている蓋然性は高いと考えられる。

4. まとめ

紀伊半島には数多くの経塚が営まれており、それらの多くは南海道・熊野参詣道沿いを中心として造営されたものが多い。紀伊における経塚について、その傾向について抽出することによってまとめに変えたい。39か所の経塚の位置をグラフにしたのが表2である。一見して解することは前述のように寺社の境内から出土することが最も多く、これに寺社の山道、寺社山間、寺社山間街道、寺社海浜からの出土を加えると70%（27件）が寺社と関係がある場所に造営されていることが看取される。次いで山間に造営されたものが11%（4件）、街道という視点で見れば9%（3件）、寺社の山間街道も加えると15%（9件）となる。

このことは、熊野三山と蟻の熊野詣といわ

れた熊野参詣道との密接な関係を改めて示す数字であり、例外を除き紀伊半島における経塚造営が吉野、高野、熊野のいわゆる「三野」がその中心地であったことは言を俟たないであろう。

表3：埋葬品の比率

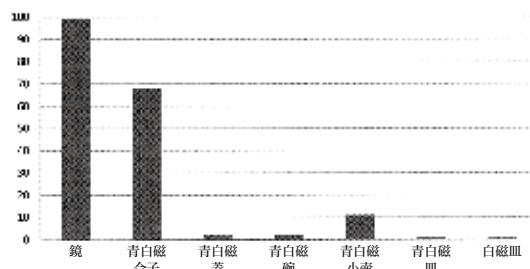


表3から埋納品の比率を見ると鏡が圧倒的に多くすべての経塚に収められていることがわかる。埋納品に鏡が多いのは、モノの姿を余すところなく映し出すことからヒトの心も真澄鏡の前では本心まで映し出し、包み隠すことはできないという、鏡の持つ神秘性から畏怖の念を呼び起こし、鏡をご神体として崇める心理を良く表している。

鏡について多いのは青白磁合子が多い。隅田八幡経塚においても鏡について多いのが青白磁合子である。なお、隅田八幡神社経塚では火打鎌が4点出土しているが、この例以外は承知していないので当経塚に限っての埋納であるかもしれない。

経筒について表したのが表4、表5で集中する領域があることが読み取れる。平安時代の経筒は21cm～24cm前後、鎌倉時代は18cm前後、室町時代は9～11cmの値を示す。このことから第1経塚の示す年代はおそらく室町時代と考えて大過ないであろう。

表2：経塚立地

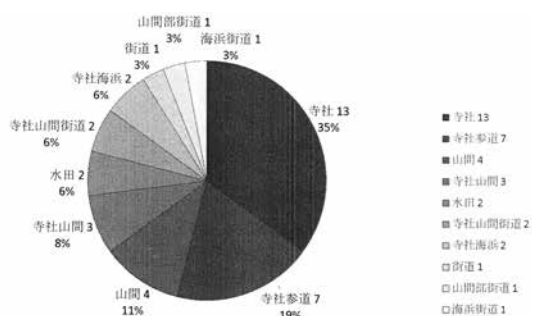


表4：和歌山県出土経筒法量（総高と口径）

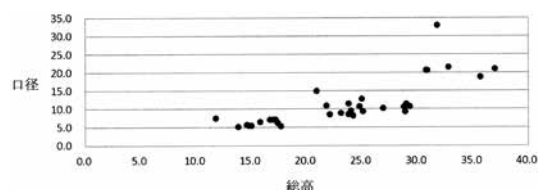


表5：和歌山県出土経筒法量（身高と口径）

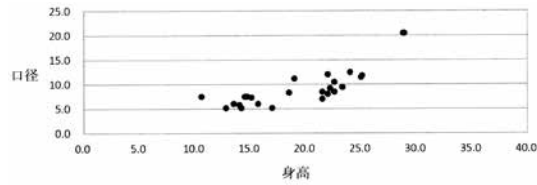


表6：和歌山県出土経筒法量（総高と個数）

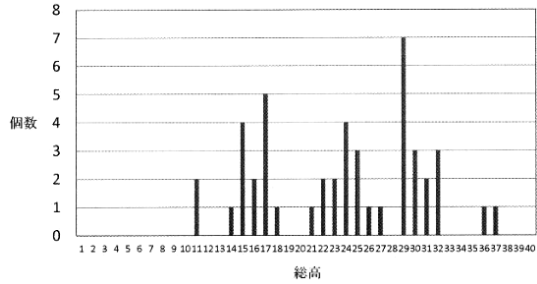


表6からは経筒の大きさが平安時代、鎌倉時代、室町時代と明らかに3区分していることが理解される。表にはしていないが経筒の製造は陶製、銅板製、瓦製、鋳銅製であることを付記しておく。

【参考文献・引用文献】

図1・表1：藤森寛志他（2017）より転載

図2：和歌山県（1983）より転載

表2-6：河野（2007）を元に作成

写真1・2：和歌山県立紀伊風土記の丘提供

河野恭子 2007「和歌山県内の経塚についての一考察」『郵政考古紀要』第41号 大阪郵政考古学会

国史大辞典編集委員会 1984『国史大辞典』4 吉川

弘文館

小山靖憲 2000『熊野古道』岩波書店

関秀夫 1984『経塚地名総覧』考古学ライブラリー24

ニューサイエンス社

巽三郎 1979「経塚」『和歌山の研究1』地質・考古

編 清文社

橋本市教育委員会 1999『平成10年度 隅田八幡神

社経塚発掘調査概報』橋本市教育委員会

藤森寛志他 2017『道が織りなす旅と文化』和歌山県

立紀伊風土記の丘

保坂三郎 1977「経塚」『新版 仏教考古学講座』第

6巻 雄山閣

和歌山県史編纂委員会 1983『和歌山県史』考古資料

和歌山県